

「学生による授業評価」の評価と授業改善

平 沢 茂

(教育学部教授・教育研究所所長)

1. 教育に係る2つの言葉

「理解できないのは、学生の努力不足」。これは、大学教員に限らず、多くの教員の意識の中に根深く存在する思いである。こんな言葉がある（これらの文は、教育方法の講義で、繰り返し学生に示している）。

① There can be teaching without learning.

② There cannot be teaching without learning..

アメリカの教育学者、シェフラー (Shefler, I.) の言葉である。ちなみに、2つの文を示して学生にその意味を問うと、ほぼすべての学生がその意味を取り違える（この辺りに日本の英語教育の問題が見える）。本題から逸れるけれど、その取り違えを記してみよう）。

① 予習しなくても教えることはできる。

② 予習せずに教えることはできない。

can、cannotという語を見ると、文脈も考えずに、反射的に「（することが）できる」「（することが）できない」と訳してしまうのである。大事な点は、次の3点である。

* learningの主体は学習者である。

* teachingの主体は教師（指導者）である、

* There can(not) beは、「できる」「できない」ではなく、「ありうる」「ありえない」である。

直訳で言うなら、正しくは、

① 学習を伴わない指導(教授) はありうる。

② 学習を伴わない指導(教授) はありえない。

とすべきだろう。意識するとすれば、次のようになる。

① → 学生は何も学ばなかった（分からなかった）と言うが、ともかく指導はしたのだ（私は学生に教えた。何も分からなかったというのは学生が悪い）。

② → 学生が何も学ばなかった（分からなかった）とすれば、そんな指導はなか

ったのと同じだ（学生に教えたつもりであったが、学生は分からなかったという。だとすれば、指導したことにはならないではないか）。

有り体に言って、多くの大学教員の授業に関する意識は、①である。大学の大量化が進行する中で、分かろうとする努力をしない学生が多くなっていることは事実である。しかし、それを踏まえて、分かろうと努力させることもまた、教師の仕事なのである。大学におけるFDは、こうした大学教員の意識改革への挑戦なのである。

2. 学生による授業評価

FDと言えば、「学生による授業評価」という安直な発想が、過去のものとなりはじめているのは、まことに結構なことである。「学生による授業評価」は、FDに取り組んでいますという外向けのアピール効果はあるだろう。しかし、個々の教員にとって、効果的な授業改善の手だてであるか否かというこのから考えると、実は問題が多い。そもそも、「学生による授業評価」では、学生の特性が考慮されていなかったり、また、授業形態やねらいに即した質問項目が用意されていなかったり、とその信頼性に大いに疑問がある事例が多いのである。

「Ongley (1975) は、よく練られた講義において講義内容を完全にカバーしてくれる良心的な教師を高く評価する学生もいれば、基礎的な情報は自主的な学習において獲得することを好み、独自性と、簡単に入手できない情報の提供を求めている学生もいることを見出した」（ビアド・拙訳『大学の教授・学習法』1982年、玉川大学出版部、p. 411）

「学生による授業評価」の信頼性についての研究は、「ある程度信頼しうる」とする結論を導くもの、「余り信頼できない」という結論に至ったもの、に2分されていると言ってよい。

「問題となっている点は次のようなことである。

- 効果に関する評価は学問的な業績と関連づけられているか。
- 学生の教授法に関する評定にはどのような要因が影響しているか。
- 評価はグループ間で矛盾していないか。
- 学生の評価は教師の実践における変容を見抜いているか。」（前掲、p. 412）

「学生による授業評価」では、学生自身の学問的関心、学習へのモチベーションの高さ、学習努力等が、評価に密接に関連することは、よく知られている。教室での座席の位置、出席状況、成績と授業評価との相関はかなり明白なのである。「学生による授業評価」を推進している人々は、この辺りのことをどの程度理解しているのだろうか。時々ふと疑問を持つことが多い。

私は、多くの大学教員が、アンケートはほとんど役に立たないと言っているのを聞いている。と言って、彼らが、自らの授業について省みない教員だということではない。授業改善のための資料としては役に立たないと言っているのである。では、授業改善に役立つものは何だろう。彼らの話を総合していくと、次の3つが浮上してくる。

① 少数の学生と、授業のどこがわかりにくかったか、どこが興味深かったかなど、授業についての忌憚ない議論をする。

② 授業の目標がどの程度達成されたかを把握する（つまり、期末テストなどで、学生の正答率はどの程度であったか）。

③ 同僚の教員との授業検討会、情報交換会。

学生による授業アンケートをする場合、ともかく、何について、どのように聞くのかをもっと詳細に詰めなければならない。

ところで、日本でも導入されるようになった大学の認証評価について、日本のモデルとなったと考えられるイギリスでは、次のような様々な意見があったことをお伝えしておこう。

「Harrison (1983) は、次のようなことに不満を訴える教職員もいると報告している。すなわち、長々とした、時にはダラダラと続くコレッジと認可審査員とのやりとり、開発チームと審査員との間の個人的会話の不足（審査員が何を要求しているのかということに対する必然的な疑念を生じることになる）、交渉の過程で考えを変えらると思われる審査員のいないこと、である。もっと多い教職員の不満は、このような申請のために必要なコスト、特に申請計画を用意し改訂するために費やす時間に関することで、彼等の第1の任務である教育という仕事ができなくなってしまうと彼等は言っている。もちろん、機関内のメンバーの間で、必要と思われる議論や相互交渉をしたり、目的・目標に関する話し合いをしたりすることは、有益なことではあると感じている者もいる。」（前掲、p.413）

3. 授業設計の視点と本学におけるFD

大学の授業で、教師が学生に伝えたいメッセージが学生に届いているか、学生につけたい学力が学生の中で育っているか、それらを客観的に把握し、授業改善に取り組むことは不可欠である。

上の3行をお読みいただくと我々のすべきことはご理解いただけよう。要するに授業設計（instructional design）の視点が不可欠なのである。

授業設計の根本は、授業を仮説と考えることである。授業を仮説と考えるというのは、次のように説明しよう。

「Xという特性を持つ学習者に、Yという設計に基づいて授業をすれば、Zという成果を上げることができる（はずだ）。」

この仮説が正しいか否かを常に検証することが授業評価だということになる。

さて、この仮説で重要なのは、Zという成果、つまり授業の目標である。目標が達成されたか否かの見極めが、すなわち、授業評価に他ならない。と言うことになると、授業の目標は評価可能な目標でなければならない。授業設計では、評価可能な目標に必要な要素として、①条件、②目標行動、③水準、が挙げられている。この辺のことになると、様々な意見もあろうから、ここでは、これ以上の追求は避けておきたい。

ただ、授業設計の理論は、授業改善を目指す者に一定のヒントを与えてくれることは間違いない。

さて、本学のFDをどう考えどう進めるか。この報告書で性急な結論を提起するつもりはない。この報告書が目指しているのは、他大学の多様な実践に目を留めてもらい、本学におけるFDの在り方に関する議論が喚起されることである。本学の特性を踏まえた本学のFDをどう作り、どう進めるか。その議論を喚起したいということである。

研究所ができることは情報の提供であって、推進の担い手になることではない。全学的な議論を喚起し、方向性を固め、進めるためには、しかるべき組織を形成する必要がある。

4. 『文教大学の授業』

別項でも触れたが、『文教大学の授業』はFDの1つの優れた事例である。これは、1996年から刊行が開始され、毎年数点刊行されている。昨秋に刊行されたものが数えて25号である。全教員に配布しているので、お読みいただいているのではないかと考えている。著者の了解を得たバックナンバーは、全て本研究所のホームページに掲載しているので、一度お読みいただきたい。

もちろん、これがあるから、もう何もしなくてよいなどと言えるはずもないし、言うつもりもない。ただ、新しいFD開発にあたっては、こうした遺産をも生かしてもらえたらと願って、あえて、この刊行物に触れたのである。

ともあれ、FDなしに大学の生き残りはない。そういう覚悟で、何かをしなければならぬことは確かである。